新文化
出版界唯一の専門紙
株式会社
新文化通信社
郵便番号　170-0005
東京都豊島区南大塚2−39−7　ヤマモト大塚ビル
電話　03-3942-5561
FAX編集03-3942-5568
振替東京00170-7-56511
発行人　丸島 基和
本紙購読料金
半 年…17,600円（税込）
（毎週木曜日発行）
Shinbunka online
www.shinbunka.co.jp/

この人この仕事

パウルーム

黒木 秀子氏

今年4月、東京・青山（港区）に図書室つきのクリニック「パウルーム」が誕生した。主に小児医療を手がける同院で、大人と子どもの心のケア、図書室の管理を担うのが黒木秀子氏だ。夫である院長と、二人三脚でクリニック運営にあたる。

待合室には、司書が選書した児童書約1000冊を蔵書している。ブレインテックの図書管理システム「情報館」を導入しており、OPAC（利用者の検索システム）も公開。患者として来院した人は1人3冊まで、2週間借りることができる。

このように一風変わったクリニックにしたのは、「今、家に本がないという家庭が増えているなかで、本が当たり前にある環境を地域の人に提供したかったため」という。

公認心理師、臨床発達心理士の資格をもつ黒木氏は、読書セラピーの効能を、「物語を読むことで別の生き方があると知り、今の自分を相対化することができる。古典的に読み継がれてきた名作を読破することは、自分に自信をもつことにも繋がります」と説く。

黒木氏がこう語る背景には、自身が読書教育「アニマシオン」の提唱・実践者として活動してきた経験がある。

図書室つきクリニック運営
アニマシオンの普及にも尽力

アニマシオンとは、スペインのジャーナリスト、モンセラット・サルト氏が確立したグループ型の読書教育法。日本には1997年に、同氏の著書の翻訳刊を通じて紹介された。

やがて、日曜学校の講師を務めていた黒木氏に、日本におけるアニマシオンの〝伝道師〟として白羽の矢が立つ。サルト氏にも直接指導を受け、年間100回程度の研修会や講演会を行うようになる。解説書も複数上梓し、普及に尽力してきた。

「当初は、学校の先生や公共図書館の司書が主な対象者でしたが、学校図書館の現場は予算がなく、荒涼たる状況でした。ここ約20年で、学校司書の配置が推進され、政府の『子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画』にも『アニマシオン』という文言が盛り込まれるなど、状況は改善されてきています」

現在もパウルームを拠点に、学校に対するアニマシオン用の本の貸出や、勉強会を実施している。

黒木氏は1955年、東京で生まれ育つ。電車で片道1時間かかる小学校の登下校中に読書に耽溺し、「本に救われた」という強い想いをもつ。85年まで編集者として従事し、育児のために退職。その後も地域の子ども図書館運営に携わるなど、一貫して「本」を軸とした人生を送ってきた。「子どもの本には力があるのです」と目を輝かせる。（杉）

文化創造的ライブラリー　日比谷図書文化館の役割

図書館／ミュージアム／カレッジの機能

図書フロア1100坪　蔵書約22万部

日比谷図書文化館は出版産業の中心地である千代田区の図書館として、出版文化の魅力を伝えるとともに、業界の現況について情報発信を続けてきた。また「滞在型図書館」であることも大きな特徴のひとつとし、展示やイベントなどにも注力。コロナ禍前の19年には年間来館者数が70万人を突破した。業界内外を問わず、支持と注目を集める同館の取組みを紹介する。（本紙・勝本 育実）

日比谷公園の緑に囲まれた日比谷図書文化館

小学館・集英社プロダクション・TRCなど指定管理者

千代田区立日比谷図書文化館は展示を行う「ミュージアム」と、講座などを催す「カレッジ」、そして図書館の機能を併せもつ文化複合施設である。図書フロアの面積は1105坪、約22万部の蔵書は「アート」「ビジネス」「地域情報」を軸に揃えてきた。本にまつわる経済活動の中心であり続けた千代田区にとって、出版は地域情報の重要なテーマだ。

2011年の開館以来、小学館・集英社プロダクション、図書館流通センター（TRC）、シェアード・ビジョンなどで組織するコンソーシアムが指定管理者を担う。

20年には、出版業界の現況と問題を考える連続講座「これからの書店 図書館 出版社 取次」を開始した。最終的に一般読者も含めた議論の場をつくることを構想し、立場の異なる業界の第一人者が各回で登壇。専修大学の植村八潮教授、日販グループホールディングスの富樫建専務、山梨の老舗書店である朗月堂の須藤令子社長が講師を務めた。

全6回のうち21年1月に予定していた第4回からコロナ禍で休止を余儀なくされたが、今年6月30日に、トーハン社外取締役で上智大学教授の柴野京子氏による講座を開催し、リスタートした。

小野口氏㊧と菊池氏

連続講座の発案者で同館アドバイザーの菊池壮一氏は「何を取り上げていくべきか、講座をやり続ける価値があるのかは、
業界の動き
判断していき
す。
休止してい
界および図書
境は変化し続
「街の本屋さ
して、日本の
議員連盟」は
館による地元
した仕入れを
部図書館では
タルデータ化
にメール送信
可能になった
元書店優先の
現する場合、
制度と方策で
かや、図書館
る著作権者の
する「公共貸
を日本でどう
くべきかな
題について、
がまだまだ必
いえるだろう

「連続講座」で情報発信　業界の課題など提起

菊池氏はリブロ（当時）で取締役など要職を歴任後、日比谷図書文化館の図書部門長を16年から23年3月まで務め、同4月から現職に就いている。

「出版を大切な産業と位置付ける千代田区の方針のもと、区の中央館である千代田図書館が業界関係者との懇談会や神保町の街案内イベントなどを催してきたことが、今回の連続講座の下地になった」と回想する。

とくに、19年に日比谷図書文化館で行われた討論会がひとつの転機となった。これは千代田図書館が13年から実施してきた業界関係者間の情報交換会を、初めてオープンな場で催したもの。文藝春秋の松井清人社長（当時）による「文庫本の貸出はしないでほしい」、新潮社の佐藤隆信社長による「著者と出版社が合意した一部の新刊の貸出は発売から猶予を」などの問題提起が背景にあり、出版社・図書館・書店で働く人々が集う熱い集会になったという。

ほかにも、日比谷図書文化館は出版業界を深掘りした企画を数多く実施してきた。開館間もない12年春には、連続講座「新しい図書館学」を開講。この7月には単発で「縦スクロールマンガ」をテーマにした講座を行うなど、様々な切り口で
情報を発信し
れらの講座は
アムの各企業
し合って立案
6月30日、
による講座
書環境と社会
プ 図書館・
には業界関係
約100人が
柴野氏によ
の図書館と書
が利用しやす

ベストセラー新
コロナ禍前 来館

日比谷図書文化館の図書サービス部門図書部門長の小野口史恵氏はTRCに所属。開館のオープニングスタッフを務めて以来、運営に携わってき
た。来館者に
蔵資料が目的
ば、イベント
空間を使い
い。本当に様
と語る。
滞在時間を
しめる図書
も、同館の大
5フロアの
が図書フロア
人を収容可
ル、美術展
示室、書籍・雑
うカフェな
コロナ禍前の
間来館者数が
破。千代田区
区民でなくて
りることがで
民による利用
ロナ禍で減少
数も順調に回
そうだ。
展示室を利
展以外にも、
活用した小規
館内の各所で
館者の目を引
ル席などを設

本の売り上げを伸ばす製本技術
加藤製本